上越教育大学研究紀要　第26巻　平成19年２月
Bull. Joetsu Univ. Educ., Vol. 26. Feb. 2007

笑いを描写するオノマトペの変遷
― 中古から近代にかけて ―

中　里　理　子*

（平成18年９月29日受付；平成18年10月30日受理）

要　　旨

「笑い」の表現には①笑い声，②笑うときの表情･笑い方，③笑うときの姿態，の描写がある。①と②に関して，中古から近代までのオノマトペの変遷を見てみると，笑い声を表す擬音語も表情・笑い方を表す擬態語も，近世にはすでに現代使われているオノマトペの典型的なものが確立していたことがわかった。笑い声を表す〈模写に近いオノマトペ〉は近代以後現代に至るまで個性的なオノマトペの工夫が見られるが，笑い声を表す〈象徴度の高いオノマトペ〉と，笑いの表情・笑い方に関しては，近代になって新たに工夫されたオノマトペはほとんど見られなかった。近代，特に明治期には，笑う表情と笑いの内容に関してオノマトペ以外で描写した表現がさまざま見られるが，これは明治期に正確で細密な描写が目指されたことと関連があり，笑いに関するオノマトペが新たに工夫されなかったことの要因の一つであると考えられる。

KEY WORDS

オノマトペ	onomatopoeia	笑い	laugh and smile	笑い声	laughter
表情	expression	姿態	gesture		

は　じ　め　に

笑いの表現には，①笑い声，②笑うときの表情･笑い方，③笑うときの姿態，の描写がある。このうちオノマトペによる表現があるのは ①笑い声，②笑うときの表情・笑い方である。現代語のオノマトペを見てみると，笑い声を表す擬音語については，「あはは」「えへへ」のようなよく知られたものだけでなく，「ぐふふ」「ひゃはは」など個性的なものがさまざま見られるが，表情や笑い方を表す擬態語については，「にこにこ」「にやり」などの他は，あまり多くのオノマトペが見られない。「笑い」に関するオノマトペは，どのように変化してきたのだろうか。筆者はかつて「泣く」行為及び「涙」に関するオノマトペを調査し，現在使われているオノマトペの基本的なものがすでに中古でも使われており，その後近世までに幾つかのオノマトペが加わり，近代には現代語の代表的なものがほぼ出そろっていることを確認した。「泣く」行為も「笑い」もどちらも基本的な感情表現であるが，今回は「笑い」に関するオノマトペを取り上げ，時代を追って表現の変遷を辿ってみたい。

収集する用例は中古から近代（明治・大正）までとする。中古から近世は，国文学研究資料館の日本古典文学本文データベース[注1]を基に調査し，適宜『岩波古典文学大系』を参照する。

*　言語系教育講座

また，調査例を手がかりに，『古語大辞典』（角川書店），『日本国語大辞典』（小学館）を参照して補っていく。近代は，新潮文庫の CD-ROM『明治の文豪』『大正の文豪』による調査を基本とし，必要があればインターネット電子図書館「青空文庫」で調査を補う。

1　笑い声を表すオノマトペ

笑い声を表すオノマトペは，「あはは」「ほほほほ」など，笑い声を忠実に言語音に写そうとした〈模写に近いオノマトペ〉と，「げらげら」「くすくす」のように，笑い声を類似の言語音に聞きなした〈象徴度の高いオノマトペ〉がある。前者の場合は，近現代の文章では「あはは。そうだね」のように，会話文の中で独立した感動詞として用いられることがあるが，後者の場合は，「げらげら（と）笑った」のように，「笑う」を修飾する副詞の形で表される。中古と中世の作品では会話文として独立した笑い声という区別はつけがたいが，近世以降は，この違いを考慮しながら考察を加えたい。

1.1　中古の笑い声

中古の作品では，個人の笑い声に「ほほと笑う」「むむと笑う」の２種類，複数人数の笑い声に「さと笑う」「さざと笑う」の２種類が見られた。

① 人の**ほゝ**と笑へば恥づかしうて」といへば　（落窪物語）
② たゞ「**むゝ**」と，うち笑ひて，いと口重げなるも　（源氏物語）
③ これはまた聴聞衆共，**さゞ**とわらひてまかりにき。　（大鏡）
④ 一度ニ**散**（さ）ト咲（わらひ）テ失ニケリ　（今昔物語）

「ほほと笑う」は『宇津保物語』『栄華物語』にも見られ，笑い声として確立した表現であったと思われる。「むむと笑う」は『源氏物語』（末摘花）にしか見られず，口を閉じて笑う独特な笑い声の表現であろう。複数人の笑いのうち，「ささと（さざと）」は，「人々のさゞとはしれば，あやしくてみ候しかば（大鏡）」のように，「笑い声」としてだけではなく，大勢が騒いだり物音を立てたりするときに使う語であった。「さゝめく」という語があることからも，笑い声に限定されていないことがうかがえる。中古の作品では，「泣く」に関する表現に比べて「笑い」に関する表現が少ないのだが，中でも笑い声の描写はほとんど見られなかった。

1.2　中世の笑い声

中世の作品には，個人の笑い声が何種類か見られ，複数人数の笑い声も中古とは違ったオノマトペが見られた。

⑤ めづらしきあずま男をこそ，御らんぜられ候はんずらめ」とて，**から〳〵**と笑ひ給へば　（平家物語）
⑥ 「是は，かう〳〵の時，仲胤がしたりし句なり。**ゑい〳〵**」とわらひて（宇治拾遺物語）

⑦　仲胤僧都，「**きやう**〳〵」とわらひて，（宇治拾遺物語）
⑧　「いかにおそろしくおぼしめし候覧」など申て，**きう**〳〵とわらひて候けり。（古今著聞集）
⑨　三人共**カラカラ**ト笑ケルガ，（太平記）
⑩　あつまれる人共，一どに「**は**」と笑ひたるまぎれに，（宇治拾遺物語）
⑪　これを聞つたへたる者ども，一度に，**はつ**と，とよみ笑ひけり（宇治拾遺物語）
⑫　人々**はあ**とわらひけり。（古今著聞集）
⑬　人々，「**ワ**」ト咲（わらひ）ケレバ，イヒサシツ。（沙石集）
⑭　敵も味方もこれをきいて，一度に**ど（ツ）**とぞわらひける。（平家物語）

個人の笑い声は⑤から⑧まで４種類が見られた。⑤の「からから」は「平家物語」の用例を初め，他の軍記物語，御伽草子等に多く見られたもので，大声で笑う声を表すオノマトペとして広く用いられた様子がうかがえる。⑥の「ゑいゑい」は，古典作品ではかけ声に用いられることが多く，他の作品に笑い声を表す例は見られなかった。笑い声を表すオノマトペとしては特殊である。⑦の「きゃうきゃう」は，古典文学大系本の補注に「板本『きゃら〳〵』」とあり，⑧の「きうきう」は補注に「学本は『きらきら』ともよめる」とある。いずれも他の作品には見られない独特な笑い声だが，大声で笑う声を工夫して表した，個性的なオノマトペであると考えられる。中古に見られた「ほほと」は，古典文学大系の中世の作品には見られなかった。また，調査例にはなかったが，『古語大辞典』によると「犬筑波集」の中で「ころころ」という笑い声が使われている。

複数人数の笑い声を表していたのが⑨から⑭までである。中古に見られた「さと」「さざと」は見られなかった。⑨の「からから」は，個人の笑い声を表すときに多く用いられるので，集団の笑いというよりは，三人それぞれの高笑いを表しているのであろう。⑩「は」と⑪「はっと」⑬「はあと」は，「は」から派生したものであるが，現代のように個人の笑い声ではなく，集団のどよめく笑い声として使われていたことが注目される。⑭の「わと」は，「はと」と音声面で通じており，「はと」の表記で「わと」と発音されていた可能性がある。「わと」は，現代の複数人数の笑い声や歓声を表す「わっと」につながっていくものであろう。⑭「どっと」は，「平家物語」「太平記」「義経記」「曽我物語」などの軍記物語に見られた。これらの作品では，「平家物語」に１例だけ「はと」が見られただけで，それ以外はすべて「どっと」を使って集団の笑いを表していた。調査の範囲内では，「はと」と「どっと」を同じ作品で使った例は他にない。これは，作品のジャンルによるものか，二語の違いによるものかは明らかではない。もし違いがあるとするならば，「どっと」はどよめくような迫力のある笑い，「はっと／わっと」は陽性の笑いのイメージがあったのではないかと推測される。

1.3　近世の笑い声

近世の作品では，会話文をそのまま写したものがあるため，笑い声の模写に近い，生き生きとしたオノマトペ，単発的なオノマトペも多く見られた。

⑮　仁者の詞にひるまぬ高綱**から**〳〵と打笑ひ。（鎌倉三代記）

⑯　いはせも果てず九平次**かっらかっら**と笑ひ。　（曽根崎心中）
⑰　はったと睨んで申さるれば。十蔵**かんら**︿と笑ひ。　（出世景清）
⑱　忽地（たちまち）「**靦然**（かやかや）」とうち笑ひ　（椿説弓張月）
⑲　景清**けら**︿と笑ひ。　（出世景清）
⑳　ヱヽこの馬鹿やらうめ。何を**げら**︿わらうのだ。　（東海道中膝栗毛）
㉑　私（わつち）の面を見て，**げた**︿と笑ひやした。　（笑語草かり篭）
㉒　又ひとりの女，われながら**くつ**︿と笑ひ出して，物をもいはざるを　（好色一代女）
㉓　亭主，巨燵から顔を出し，**ぐつ**︿笑う。　（近目貫）
㉔　和尚おかしくおぼしめし，**ころ**︿とわらひ　（一休諸国物語）
㉕　よくした︿とほむれば誠と思ひ，**きやら**︿と笑ひて，ひたむしりにむしりぬ。　（おらが春）
㉖　将門首**しゝ**とわらひて消うせしとなり　（囃物語）
㉗　小むつ**ふっ**と笑ひ出し。ありゃなんというお経ぢゃと原をかゝへてをかしがる。　（国姓爺合戦）
㉘　**フヽン**とわらひながら，おもてのほうをむいてよびながらゆく。　（東海道中膝栗毛）
㉙　「**ハヽヽヽヽ**」ト笑ひ這入る。　（幼稚子敵討）
㉚　$\boxed{\text{たいこ}}$　なるほど，いづれな。**アハヽ**︿︿トつきもない所でそらわらひする。　（傾城買四十八手）
㉛　「な，な，何（なん），大丈夫だ︿。**イヒヽイヒヽイヒヒヽヽヽヽ**　トまけおしみのにが笑して　（浮世風呂）
㉜　**ヱヘヽヽヽヽ**　トはなのさきへつき出してわらつてゐる。　（浮世風呂）
㉝　**ヲホヽヽヽヽ**とむせうにわらへば　（東海道中膝栗毛）
㉞　家来一度に手をたゝき。**どつ**と笑ふ。　（仮名手本忠臣蔵）
㉟　家内のものども，手をうちたゝき，**どつ**︿とわらふ。　（東海道中膝栗毛）
㊱　一同に**ふあ**引とわらひける。　（軽口御前男）
㊲　一どに，**は**とわらひあへりける　（白癡物語）

⑮から㉝までが個人の笑いを表すオノマトペ，㉞から㊲までが複数人数の笑いを表すオノマトペである。用例からもわかるように，個人の笑いの種類が増えている。増えたのは特に㉙から㉝までの，笑い声を模写したに近いオノマトペであり，ここに挙げた以外にも「ワハ︿」「ウハヽヽヽヽ」など，細かい部分で音の異なる，様々な型のオノマトペが見られた。現代語で使われている，実音声に近い笑い声の代表的なものは，「あはは」「いひひ」「うふふ」「えへへ」「おほほ」というハ行音の笑いの型であるが，近世ではそれらがほぼ出そろっており，笑い声の〈模写に近いオノマトペ〉に関して，すでにその典型ができあがっていたようである。

⑮から㉘までは，〈象徴度の高いオノマトペ〉である。⑮の「からから」は前代から見られたものだが，近世になって「からから」から派生した⑯の「かつらかつら」，⑰の「かんらかんら」のような型の広がりが見られた。⑱の「かやかや」は，古典文学大系本の補注によると，「『かやかや』は大勢の人が騒がしく声を立てるさまにいう語。馬琴はそれを声高く笑う意に使用し」とあり，「からから」の音に近いオノマトペ「かやかや」を，馬琴が独自に用いたもののようである。『古語大辞典』には他に「花暦八笑人」の例があり，調査範囲でも「笑話の林」

に１例見られたが，全体にその例はわずかで，「からから」が一般的に広まったのに対して，「かやかや」はあまり広まらなかったのではないかと思われる。⑲の「けらけら」，⑳の「げらげら」は現代でも用いるもので，「けらけら」は「かん高い声」，「げらげら」は「遠慮なく大いに笑うようす」という[注2] 現代の用法と等しい使われ方をしている。「けらけら」から生まれた「けら笑ひ」という語も使われていた。㉑の「げたげた」は噺本に何例か見られた。『古語大辞典』によれば「けたけた」も近世に使われていたようである。㉒の「くつくつ」は現代語の「くつくつ」「くっくっ」に当たるが，西鶴の浮世草子，滑稽本，洒落本，噺本等に多く用いられており，一般的なオノマトペであったようである。㉓「ぐつぐつ」は１例見られたが，のどを鳴らして笑うようすを表したものであろう。㉔の「ころころ」は，現代では「主に女性の笑い声」[注3]を描写する際に用いられるが，ここでは男性の明るい笑い声に用いられている。㉕の「きゃらきゃら」は中世の「きゃうきゃう」にも近いが，「おらが春」に見られた以外に例はなく，「けらけら」「からから」の音の連想による一茶独自のオノマトペであろう。㉖の「ししと」は，古語においては泣き声を表すオノマトペであるが，ここでは笑い声として使われており，この作品独特の個性的オノマトペである。㉗の「ふつと」は，古典文学大系本の補注に「『ぷっと』か」とあり，「ふっと」あるいは「ぷっと」というオノマトペが，吹き出して笑う際の笑い声として使われていたようである。㉘の「ふふん」は現代にも鼻先で笑う際のオノマトペとして用いられている。

複数人数の笑い声は，㉞の「どっと」が一般的に使われていたようで，さまざまな作品中で見られた。「どっと」以外は㉟の「どっどっと」のような強調型や，㊱の「ふぁー」，㊲の「はと」がわずかに見られただけである。中世には「はと（わっと）」系が多く見られたが，近世の作品（調査の範囲内）では，ほとんどが「どっと」で表現されていた。なお，「えいえいどっと笑ふ声（媼山姥）」という例があったが，「えいえい」はここでは一種のかけ声として表されており，「笑い声」のオノマトペからは除外した。

近世では，「からから」「けらけら」「げらげら」「くつくつ」「ふふん」という，近現代にも多く見られる〈象徴度の高いオノマトペ〉が一般的に使われており，〈模写に近いオノマトペ〉としての個別の笑い声も様々に発達している。複数人数の笑い声には「どっと」が主に使われ，それ以外の新しいオノマトペは見られなかった。

1.4　近代の笑い声

明治・大正の作品になると，〈模写に近いオノマトペ〉である個別の笑い声の描写がさらに増えてくる。例えば「うはははは，うふふ，うふふ。うふふ。えッ，いや，あ，あ，チ，あはははは，はッはッはッはッ，テ，ウ，えッ，えッ，えッ，えへへ，うふふ，あはあはあは，あは，あは，ははは，ははは，あはははは（売色鴨南蛮）」のように，笑いのようすをそのまま生き生きと描写するものが見られ，多岐にわたるため，ここでは〈象徴度の高いオノマトペ〉を見ていくこととする。

㊲　**からから**と傍若無人に笑いながら　（或る女）
㊳　傍で**けらけら**と笑う声がする。　（野分）
㊴　その時与次郎は**げらげら**笑って，　（三四郎）

㊵　女共は**げたげた**笑っている。　（田舎教師）
㊶　親仁は**吃々**（くつくつ）と笑って，　（高野聖）
㊷　二人は**クック**と身を揉んで笑った。　（多情仏心）
㊸　悪党らしい口上に似げなく，**クックック**ッと，鳩のように可愛らしく笑った。（多情仏心）
㊹　顔を視合わせるとも無く視合わして，お勢は**くすくす**と吹き出したが　（浮雲）
㊺　武は思わず**クスリ**と笑った。　（二老人）
㊻　忽ち**きゃッきゃッ**と軽忽な声を発し，高く笑い　（浮雲）
㊼　耳元に**ききっ**と女の笑い声がしたと思ったら眼がさめた。　（草枕）
㊽　そのやうに甲羅は経ませぬとて**ころころ**と笑ふを　（にごりえ）
㊾　何故か**ぷっ**と噴飯そうに，笑いをこらえていた。　（多情仏心）
㊿　女は**ふふん**と笑った。　（草枕）
(51)　男は**えへらえへら**と，締のない口元に笑った。　（あらくれ）
(52)　群衆は思わず一度に**どっ**と笑い崩れる。　（生まれいづる悩み）
(53)　皆が**わっ**と笑うやら，　（歌行燈）

㊲から(51)までが個人の笑い声を，(52)・(53)が複数人数の笑い声を描写したものである。近世に使われていたオノマトペがほとんどを占めており，それを一部変形させた形が加わっている。㊲「からから」㊳「けらけら」㊴「げらげら」㊵「げたげた」は近世から見られたもので，近代の作品にも多く見られた。㊶の「くつくつ」は大正の梶井基次郎「雪後」にも「クツクツと含み笑いをしていた」という例があり，近代も使われ続けているオノマトペである。これを変形させた㊷や㊸のような例もある。㊹の「くすくす」は，『日本国語大辞典』に「和英語林集成」の例があることから，近世末期には使われていたと思われる。近代では多くの作品に用例が見られ，また，㊺の「くすり」のように「くす」を語基とした変形を持つ点で，オノマトペとして定着したさまがうかがわれる。㊻～㊽は女性の笑い声を表したものである。「ころころ」はすでに中世から使われていたものである。「きゃっきゃっ」は近代になって見られる例で他の作品にも例があるが，「きき」はもう１例「野分」に見られたのみで，漱石独自のオノマトペと捉えた方がよいだろう。㊾の「ぷっと」吹き出すさま，㊿の「ふふんと」鼻先で笑うさまは，近世にもすでに見られたものである。(51)の「えへらえへら」は「えへへ」という〈模写に近いオノマトペ〉に接辞「ら」を付けて状態描写として象徴度が高くなったもので，近代になって派生した語のようである。

複数人数の笑い声は，(52)・(53)に見るように前代と同じく「どっと」が多く使われ，「わっと」が何例か見られた。「奥座敷のほうでワッワッと云う高笑いの声がする。（浮雲）」のように，「わっと」の変形も見られた。

近代の「笑い声」を表すオノマトペを見ると，ほとんどが近世までに見られたもので，近代はそこから派生させたものがいくつか加えられただけであった。近代になると，笑い声をそのまま描写する場合が多く，〈象徴度の高いオノマトペ〉には新たな工夫は見られなかった。

2　表情・笑い方を表すオノマトペ

次に，笑いの表情や笑い方を表す擬態語としてのオノマトペに関して見ていきたい。中古には例が見られず，また中世も種類が少なかったため，中世・近世をまとめて整理し，その後に近代の例を見ていく。

2.1　中世・近世のオノマトペ

中世の作品はオノマトペの種類が少なく，近世になってさまざまな例が見られた。

① みすをやをら引あけて，**ゑみ〳〵**として　（古今著聞集）
② 何事ニテ候ヤラン。」ト問ヘバ，此者**莞爾**（にっこ）ト打笑，　（太平記）
③ 女房**にっこ**と打笑ひ。　（重井筒）
④ サア〳〵早う小袖も着替へて**にっこり**笑うて　（心中天の網島）
⑤ ア丶機嫌よう**にこ〳〵**と笑うてござんする。　（傾城反魂香）
⑥ 竹沢**にこつと**笑を含み，　（神霊矢口渡）
⑦ 己が事かと心得て**につ**と笑もおかし。　（根南志具佐）
⑧ ちぶさはなれてそろ〳〵と這出てひとり**にた〳〵**笑ひ　（ひらかな盛衰記）
⑨ おさよ抱子の頭を探り，**につたり**笑ってそのまま落入る。　（小袖曽我薊色縫）
⑩ 母**ほいやりと**笑顔して。　（心中天の網島）
⑪ 見た目に**ほやりと**笑ひ。　（平家女護嶋）
⑫ 俄に作る。**ほや〳〵**笑顔。　（伽羅先代萩）
⑬ 勝詞記（しようじき）咄ハ，一たん**ゑこ〳〵**と笑らふにハあらねども，　（正直咄大鑑）
⑭ いつも朝起キリヤこハい顔ナ姑も，元朝とて**わさ〳〵**と笑兒。　（歳旦話）

①の「ゑみゑみと」は中世の作品に見られたもので，「笑み笑み」がオノマトペらしく用いられたものだろう。近世では例が見られず，一般化しなかったようである。②③の「にっこと」は中世にも近世にも多く見られた。語基の「にこ」をそのまま「にこと」とした例は，『古語大辞典』によると「平治物語」「源平盛衰記」に例があるようだが，表記が「にこと」でも「にっこと」と発音された可能性もある。調査範囲内には「にこと」は見られず，代表的な形ではなかったようである。④「にっこり」⑤「にこにこ」⑥「にこっと」は語基「にこ」のさまざまな派生形で，『古語大辞典』では他に，中世の「にこと」の例，近世の「にこりと」の例を見ることができた。⑦「にっと」は「日葡辞書」にも項があり，中世末には使われていたようである。⑧の「にたにた」，⑨の「にったり」は近世になって見られた例である。『古語大辞典』によると「にたり」の形もあるが，「にたっと」の例はなかった。これらに似たオノマトペの中で，近世では他に「にやり」という語が『日本国語大辞典』の用例で見られた。⑩「ほいやり」⑪「ほやり」⑫「ほやほや」は，近世のいくつかの作品に見られたものである。現代には見られないオノマトペであり，近世独特のオノマトペである。⑬の「ゑこゑこ」は，『日本国

語大辞典』では「えごえご」の項に「にこにこ」という語釈があり，この例も同様に解釈できる。現代では方言に「えこえこ」が残っているようである[注4]。⑭の「わさわさ」は，『古語大辞典』によると「明るくうきうきしたさま」に広く用いる語であり，笑い方を特に表すものではない。

全体としては「にっこと」「にっこり」「にこにこ」といった「にこ」系が圧倒的に多く見られ，他に「にたにた」などの「にた」系，「ほやほや」などの「ほや」系のオノマトペが使われていた。

2.2　近代のオノマトペ

近代のオノマトペはそのほとんどが近世に見られたものであった。

⑮　**莞爾**（にっこ）と片頬に微笑（えみ）を含んだが　（浮雲）
⑯　我も仕合とおもい顔に**ニッコリ**笑って　（あいびき）
⑰　**莞爾々々**（にこにこ）笑いながら　（高野聖）
⑱　宗近君は**にこり**と笑った。　（虞美人草）
⑲　女は**にッ**と笑って見せた。　（田舎教師）
⑳　美しい歯並を見せて，**にい**ッと微笑みながら　（多情仏心）
㉑　だらしも無く**ニタニタ**と笑いながら　（浮雲）
㉒　早速**ニタリ**と笑って頷いて見せると　（くされ縁）
㉓　**ニタリニタリ**と薄笑いを見せて　（多情仏心）
㉔　すると彼女は**にやにや**と笑った。　（行人）
㉕　やがて**ニヤリ**と笑いました。　（春の鳥）
㉖　古賀は**にやりにやり**笑って僕のする事を見ていたが　（ヰタセクスアリス）
㉗　**ふっくり**と優しく微笑み　（婦系図）
㉘　**ほたほた**笑をこぼしながら甘酒を釜から飲む。　（婦系図）

⑮の「にっこ」は古語としての印象が強いせいか，他には芥川の「きりしとほろ上人伝」に１例見られただけで，一般的には使われなくなったことがわかる。⑯「にっこり」以下㉓の「にたりにたり」まで近世の用例に見られたと同じオノマトペである。⑳の「にいッと」は，「にっと」の強調形である。㉔の「にやにや」，㉕の「にやり」，㉖の「にやりにやり」は，近世では「にやり」のみ『日本国語大辞典』の用例に見られるが，近代では明治・大正ともに用例が多く，一般に広く用いられていることがうかがえる。これに似た形の「にんまり」は調査範囲では例が見られず，電子図書館「青空文庫」で検索したところ，一番古い例が昭和 15 年の海野十三の作品の例であった。「にんまり」というオノマトペは，昭和以降に用いられるようになった新しいオノマトペと推測される。

㉗の「ふっくり」，㉘の「ほたほた」は，「婦系図」にしか見られない例である。「ふっくり」は，「青空文庫」の作品に見る例では，顔立ち等，柔らかい物に対して形容されることが多い。中には「いかにもふっくり優しさのこもった動きで（宮本百合子「あられ笹」昭和 23 年）」のような柔らかい雰囲気を表す例もあったが，笑いを描写した例はない。同様に「ほたほた」も

笑いを表した例が見られなかったことから，２例とも泉鏡花独特のオノマトペであったと思われる。

笑いの表情や笑い方を表すオノマトペは，笑い声を表すオノマトペと同じく，近世に多くの種類が使用されている様相が見られた。近代以降はそれらを受け継ぎ，派生形を増やしてはいるが，新たなオノマトペはほとんど見られない。近代は近世と同様に，もしくはそれ以上に笑いの表現が多く見られるが，特に大正期の作品にはオノマトペがあまり見られない。すなわち近代以降は，オノマトペに依らない笑いの表現をしていることになる。そこで，オノマトペが多く使われないこと，新たなオノマトペが見られないことを考察するために，次節では，オノマトペ以外の笑いの表現を見ていく。

３　オノマトペ以外の笑いの表現

ここでは，オノマトペを使わずに笑い声や笑い方をどのように描写しているかを見ていく。１）笑い声，２）笑う表情，３）笑う姿態，４）笑いの内容，５）笑いの度合い，６）その他の６つに分け，近世までに見られた表現と近代の表現とを比較する。近代の用例は多く煩瑣になるため，『明治の文豪』に見られた用例を整理した。

【中古から近世まで】

１）たか〳〵と笑ふ　たからかに笑ふ　高やかに笑ふ　高笑ひ　高く笑ふ　声高く笑ふ　諸声に笑ふ　同音に笑ふ　口々に笑ふ　一どきに笑ふ

２）ゑみまぐ　ほほ笑む　笑み／笑ひを含む　笑壺に入りて笑ふ　笑顔に開く　面のゆがむまで笑ふ　おとがひをはなちてわらふ　片頬で笑ふ　笑みを作る　口を開いて笑ふ　口をゆがめて笑ふ　歯／歯茎をあらはして笑ふ　両の眼を見ひらき笑い顔する　亀のやうに笑ふ目　忍辱の笑みの眉

３）臥しまろび笑ふ　ころびまはりて笑ふ　せもはらもきるる計に笑ひふす　腹筋をよる　仰に倒れ笑ふ　掌を拍て笑ふ　手を打ちて笑ふ　箙をたたいて笑ふ　舟ばりたたきて笑ふ　頭を叩いて笑ふ　胸を打ちて笑ふ　腹／へそを抱へて笑ふ　頭を抱へて笑ふ　へそをよじって笑ふ　目引き鼻引き笑ふ　口おほひをして笑ふ　口へ袖をあてて笑ふ　袖引き笑ふ　指さして笑ふ

４）あざ笑ふ／笑ひ　嘲り笑ふ　あざみ笑ふ　あなどり笑ふ　さげすみ笑ふ　誹り笑ふ　にくみ笑ふ　にが笑ふ／笑ひ　にがにが笑ふ　せせら笑ひ　痴笑い　ほくそ笑む　興じ笑ふ　ざれ笑ふ　ゐたけ高になり笑ふ　心よげに笑む　心ちよげに笑ふ　にこやかに笑む　うれしげに／うれしそふに笑ふ

５）笑ひ給ふ事限りなし　いたく笑ひて…腹のわたきるゝ心ちして　大きに笑ふ　大笑みに笑む　大笑ひ　腹筋きれて笑ふ　笑ふべきこと甚だし　いみじう笑ふ　笑ひを忍ぶ　笑ひを殺すしづかに笑ふ　うす笑ふ　一口笑ふ　一笑

６）笑ひののしる　笑ひさざめく　笑ひどよめく　吹き出す　ひとり笑ひ／笑み　しとやかに笑ふ　ささやき笑ふ　そぞろに笑ふ　空笑ひ　ゑせ笑ひ　鬼笑い　どろぼう笑ひ

【明治】

1）高笑い　高く／声高に／声高く／かん高く笑う　調子高に笑う　癇の高い声　放笑する　声を放って笑う　声を立てて笑う　雉の鳴くようにけたたましく笑う　けたたましい笑い声　大きな声　大声　大きな破れるような声　大笑を発する　破裂したように笑う　声帯に異常のあるような恐ろしい笑い方　嘶くように　両手で耳を抑えたい位な高笑い　強壮な肺の臓から発する哄然たる笑い声　妙な声　鋭い笑い声　小さい声　低く笑う　微かな声　微かな笑いが唇を洩れた　短い笑声　朗らかな笑声　笑いくずるる声　しわがれた声　冷ややかな声　男のように　世にもあやしき声　高からぬ程に笑う　銀の鈴を振るような笑声　エヘヘ笑い　鼻で／鼻の先で笑う　鼻を鳴らす　かすかな笑いを鼻から漏らす　斉しく笑う　声を合わせて笑う

2）微笑　（頬／口元に）微笑／笑いを帯びる／漏らす　笑みを浮かべる　（片頬／顔／口角に）微笑／笑みを含む　（満面／目に）笑いを含む　（口元／顔／満面／目／目元に）笑み／微笑を湛える　（口元／顔に／目元に）笑み／微笑を／笑いを浮かべる・浮かぶ　片頬笑み　片頬をむずつかす　頬に刻まれた笑い　頬へ皺を寄せる　両頬に笑みを滴らす　えくぼを見せて笑う　額の中で薄笑い　（顔／頬／口元／唇に）微笑／ほほえみの影　（かすかなる・薄）笑いの影　笑いの波　微笑が口頭に浮かび出る　微笑／冷笑が（頬／口辺に）漂う　微笑が閃く　（顔／頬に）笑いが漲る　相好を崩して笑う　壺々口の緊（しめ）笑い　口元に一杯笑いをためる　大口を開けて笑う　口をいっぱいに開いて笑う　口元が笑う　口元に笑みを忍ぶ　歯を出して／あらわして笑う　唇をまげて／歪めて／反らして笑う　唇の両端を…下の方へ曲げて笑う　（笑いを）目尻と口元に現す　目尻と口元に笑いが萌す　眼元で／目で笑う　笑が目の底に潜む　目の中の微笑　目のふちに蕾のような微笑を含む　目の中に笑いの光が漲る　眉の柔らかな笑顔　眉が微笑に開く　笑み割れそうに

3）体を崩して笑う　身体中で笑う　身構えを崩して仰向けに笑う　笑いころげる　笑い崩れる　転げかえって笑う　笑いこける　（天井を）仰いで／仰向いて笑う　身を揉んで胸を叩いて苦しがって笑う　大きな腹を競りだして笑う　揺すり笑い　身をそらして…揺上げ揺上げて笑う　項を反らして笑う　口／口元を覆うて笑う　腹を抱えて笑う　頭を掻いて笑う　手を打って笑う　顎を前の方へ突き出して笑う

4）せせら笑い　冷笑　冷ややかな笑い　嘲笑　あざわらう　さげすんだ笑い　さげすんだように笑う　苦笑　苦笑い　苦き笑み　苦しそうな笑い　失笑　憫笑　同情の笑み　悔しそうに笑う　慎ましやかな微笑　恥ずかしげに笑む　はにかんだような笑い方　好意的の笑み　愛嬌笑い　人の好さそうに笑う　ほくそ笑み　会心の笑みを漏らす　得意そうに笑う　得意の笑み　可笑しそうに笑う　面白そうに笑う　うれしそうに笑う　愉快そうに笑う　快活に笑う　心地よげに笑う　皮肉な笑い　無遠慮に笑う　薄気味悪く笑う　寂しそうに笑う　寂しげな笑み　意地の悪い笑い　邪気のある笑い方　欺くがごとく笑う　怪しげな笑み／微笑　妙な笑　空々しく笑う

5）大笑い　大笑する　馬鹿笑い　馬鹿見たように笑う　一笑する　忍び笑い　薄笑い　片笑む　軽く微笑む／笑う　ちょっと笑う　少し笑う　わずかの笑み

かすかな微笑　笑いを忍ぶ

6）笑いののしる　笑いどよめく・どよめき笑う　ののめき笑う　笑いはやす　笑いさざめく　吹き出す　一人笑み　作り笑い　漫ろ笑み　窃笑　嗤笑　わざとらしい笑い方　思い出し笑い　子どもらしく笑う　春らしい笑い　あざやかに笑う　華やかな笑顔／微笑

近世以前と明治期を比べると，明治期のほうがさまざまな種類の表現がされていることがわかる。作品数は近世以前のほうが圧倒的に多いことから，明治の作品は，笑いの描写をする際にオノマトペ以外の表現をさまざまに工夫していることが見て取れる。

まず，1）の笑い声に関して見ると，明治期には単に大声や高い声というだけではなく，「けたたましく」「破裂したように」「強壮な肺の臓から発する」「嘶くように」「鋭い」「朗らかな」「しわがれた」など，具体的な笑い声がイメージできるような描写がされている。小さな笑い声を表すものは，近世以前には見られなかったが，明治期には「鼻の先で笑う」「低く笑う」などいくつかの表現が見られた。明治期には笑い声のオノマトペ（擬音語）を使わずに個別の笑い声を表し分ける描写が工夫されている。

2）の笑う表情に関しては，近世以前でも明治期でも，顔全体の表情や頬，口元，歯，目，眉に焦点を当てて描写する表現が見られた。明治期には，それらの部分の微妙な変化に対して，さらに細かいところまで観察されている様子が窺える。大きな笑いに関しては「大口を開けて笑う」「歯をあらわして笑う」など近世以前と大きく変わるところはなく，「笑いが漲る」「相好を崩して笑う」など多少の幅の広がりが見られる程度であるが，細かい表情を描写することで表される微妙な笑いに関して，近世以前には見られない明治期独特の表現が多々見られる。「（口元／顔／満面／目／目元に）笑み／微笑を湛える」「微笑が（頬／口辺に）漂う」「目尻と口元に笑いが萌す」「笑が目の底に潜む」など，細かい表情から窺われる笑いをさまざまに表し分けている。これらは「にこにこ」「にっこりと」「にっと」など「表情・笑い方」を表すオノマトペでは表し分けることのできないものであり，微妙な笑いが巧みに表現されている。2）の笑う表情に関する表現は，1）から6）までの他の項と比べて，細かい描写の工夫が多く見られる。

3）の笑う姿態に関しては，近世以前は「手／舟ばり／頭／胸」などを「打つ／たたく」仕草や「腹／へそを抱える」仕草，「ころびまわる」「ふしまろぶ」「仰に倒れる」など全身で笑いを表す仕草といった，大笑いする姿態を表すものが多い。小さくひそかに笑う場合は「目引き鼻引き」「袖引きて」「口おほひをして」などで表されている。いずれの場合も，姿態がいくつかの典型に当てはまり，慣用的な表現となっている。明治期の例を見ると，「手を打って笑う」「腹を抱えて笑う」「転げかえって笑う」などの大きな笑いから「口／口元を覆うて笑う」など小さな笑いまで，近世と同じような表現がされているが，その中に，「（天井を）仰いで／仰向いて笑う」「身をそらして…揺上げ揺上げて笑う」「頭を掻いて笑う」など，実際の動作を誇張せずにそのまま写し取った表現が加わっている。

4）の笑いの内容に関しては，「嘲笑い」「苦笑い」「せせら笑い」など，近世と明治期とで重なるものが多い。しかし明治期には，さらにその種類が増えており，「悔しそうに」「得意そうに」「寂しそうに」「同情の笑み」「意地の悪い笑い」など，その笑いがどういう心情から発したものかを明示する場合が多く見られた。これらは，「にっこり」「にやにや」「にっと」な

どの表情を表すオノマトペを使ってもある程度までは表すことはできるが，説明的な表現をすることでより詳しく正確に伝えることができる。

５）の笑いの度合いに関しては，１）から４）までの項に比べて，明治期に表現が工夫された跡はない。大きな笑いか小さな笑いかは重要ではなく，どのような表情でどのような意味を表す笑いなのかという細かい部分を表し分けることが目指されたためであろう。

６）のその他の描写は，「笑いののしる」「笑いどよめく」「吹き出す」「空笑い」「作り笑い」などの笑いにまつわる表現で，１）から５）までに明確に分類しがたいものを整理したものである。この項も，近世と明治期とで大きな変化はない。

１）から６）までを通してみると，近世以前と比べて明治期には，２）笑う表情と４）笑いの内容に関する表現がさまざまに発達していることが見て取れた。笑いの表情を細かく描写することに加えて，どのような笑いであるのかを丁寧に説明する傾向が見られたが，これは，一語で感覚的にわかる「オノマトペ」の機能と相反するところにあり，明治期に新たなオノマトペが工夫されなかった理由の一つと考えられる。

４　まとめ

中古から近代まで「笑い」を表すオノマトペをたどってみると，笑い声を表す擬音語も，笑いの表情・笑い方を表す擬態語も，中古・中世には多くの種類が見られず，近世になって様々なオノマトペが使われていた様相が窺われた。ただし，中古・中世の文学作品には「笑い」自体があまり描かれないため，日常の談話においては他にもいろいろな笑いのオノマトペが使われていた可能性もある。作品の用例で見る限り，近世には現代語で使われる主なオノマトペが既に使用されていることがわかった。このことは近代以後，笑いを表すオノマトペが新たに工夫されなかったことを意味している。笑い声を表すオノマトペのうち，〈模写に近いオノマトペ〉に関しては，近代でも個性的なオノマトペが生み出されており，その傾向は現代でも続いている。それに対して〈象徴度の高いオノマトペ〉と表情・笑い方を表すオノマトペに関しては，近代になって新たに生まれたものはほとんどなく，すでに近世にあったオノマトペの派生形を増やす例がいくつか見られた程度である。近世までのオノマトペは多くが近代に受け継がれているが，近世の「ほやほや／ほやりと／ほいやりと」は近代の作品に例を見ることはできなかった。近世は，様々な笑いのオノマトペが工夫された時代であったと言えよう。

近代の，特に明治期には，二葉亭四迷ら多くの作家が細密な描写を目指したが，このことが笑いの表現にもうかがわれた。細密な描写を目指した結果，笑いの表情や笑い方，笑いの内容を詳しく説明することに力が注がれているが，これは，一語で感覚的に内容を表すオノマトペのあり方とはそぐわないものである。近代は新たなオノマトペが生まれにくい状況にあったと言える。昭和になって，笑う表情・笑い方に関して，例えば「にんまり」など，従来のオノマトペに近い音を基に別のオノマトペが作られている。現代でも，「にかっと笑う」「にちゃにちゃ笑う」など新たな形のオノマトペが見られることから，今後，笑う表情や笑い方，〈象徴度の高い〉笑い声を表す新たなオノマトペが生まれることも十分に考えられる。

おわりに

笑いを表すオノマトペと「泣く・涙」を表すオノマトペを比べてみると，近代に正確で細密な描写が目指されたことの影響がどちらにも見られた。「泣く・涙」のオノマトペの場合は，泣く表情というより，涙を流す様子に細密な描写が試みられたため，「ほろり」「ぽろぽろ」「ぼろぼろ」など涙に関するオノマトペの工夫が見られた。一方，笑いのオノマトペの場合は，笑いの表情にオノマトペが工夫された跡は見られなかった。

オノマトペを研究する際に，例えば「泣く」「笑う」などの範疇を設け，語群としてオノマトペの変化を見ていくことは，オノマトペがどのように変化してきたかという全体の流れを知るための，大きな手がかりになると思われる。今後もオノマトペの語群を設定し，時代の流れの中でその変遷を追っていきたい。

【注】

1）国文学研究資料館のホームページにある電子図書館の「本文データベース」を利用した。中古79作品，中世296作品，近世505作品が検索対象である。検索のキーワードは「笑」「咲」「わら」「ワラ」「ゑみ」である。近世以降の作品で「ははは」など笑い声だけが記述されているものは，〈模写に近いオノマトペ〉として，今回の調査対象には含めなかった。

2）浅野鶴子・金田一春彦『擬音語・擬態語辞典』「げらげら」の項の解説による。

3）山口仲美編『暮らしのことば　擬音・擬態語辞典』「ころころ」の項の解説による。

4）『日本国語大辞典』「えこえこ」の項の解説による。

【参考文献】

浅野鶴子・金田一春彦　1978　『擬音語・擬態語辞典』角川書店

飯田清志　1999　「日本語の書き言葉における口語性の研究（２）笑い声表記の成立と発展（古代～近世）」『比較文化研究』45号　日本比較文化学会

飯田清志　2000「日本語の書き言葉における口語性の研究（その３）―笑い声表記の継続と転化（近代～現代）『比較文化研究』46号　日本比較文化学会

阪倉篤義・岡見正雄・中村幸彦編　『角川古語大辞典』

中里理子　2004　「『泣く』『涙』を描写するオノマトペの変遷―中古から近代にかけて―」『上越教育大学研究紀要』24巻１号

山口仲美編　2003　『暮らしのことば　擬音・擬態語辞典』講談社

Changes of Onomatopoeia of *Laughing* and *Smiling*
from the Heian Period to the Modern Times

Michiko NAKAZATO*

ABSTRACT

The expression of "the laugh" is greatly divided into three with laughter and an expression to laugh and a figure to laugh at it.Even modern ages were investigated about the onomatopoeia which showed laughter and an expression to laugh from the Heian period.As for the mimesis which showed the onomatopoeia which shows laughter, and an expression, it found that the typical thing of the onomatopoeia which the present day has already been spent on was established in the modern times.

Until it reaches the present day after the modern ages, the idea of the unique onomatopoeia is seen with the onomatopoeia which is close to the copy to describe laughter. But, the onomatopoeia whose degree of a symbol to describe laughter is high, and the onomatopoeia which shows the expression of the laugh were concerned, and the onomatopoeia which modern ages came of and which was devised newly was hardly seen.

It specially aimed at the expression which laughs, and the contents of the laugh in Meiji term without using onomatopoeia accurate minutely describe.It can think that it is one of the factors of what the onomatopoeia that this thing is related to the laugh didn't develop into.

* Division of Language Department of Japanese Language